

対無生物コミュニケーションの諸相

18人の事例と知覚体系

Communication with inanimate objects, 18 cases and their system of perception

学籍番号 47-116752
氏名 南さくら (Minami,Sakura)
指導教員 大野 秀敏 教授

動物や木や石などの無生物に命を見だし、人間と同等に扱おうとするアニミズムの思想は、現代から見ると未開な発想であり、人類がとうに乗り越えた世界観として語られる。物質主義と経済で成り立つとされる世界観は現代社会で広く共有され、こうした場において、人間は外部環境から独立して存在し、建築や土地は人間によって一方的に利用されるべき無機質なものとして存在する。

しかし、一方で近現代人の中にも無生物に生命を見だし、それらと語り合うという人々がいる。イギリスのエリカ・エッフェルという女性はエッフェル塔と結婚した。彼女は建造物やモノに人と同じような愛情を抱く対物性愛者と呼ばれる人々の一人だ。その深い愛情や絆は人に対するのと同じで、また、彼らがモノに話しかけるだけでなく、モノも彼らに話し、愛情を向けていると主張している。また、手塚宗求という人は無人の境地であった長野の霧ヶ峰に山小屋を開いたが、彼は山の生活道具であるストーブと話をし、まわりの自然物に人格を見いだす。このようにモノと話す人々は近現代の様々な分野に実際に存在する。

人文学者のフレーザーはアニミズムは人類の発展の経過であったと述べたが、これ

らの人々は、物に生命があると感じる知覚の普遍性を示しており、未開人の幼稚な科学に起因するものでないということを示している。この研究は無生物と対話する近現代人の事例をもとにして、人間の普遍的な性質と物質主義をこえた人体イメージを明らかにすることを目指すものである。

<研究の方法>

近現代人の著作や芸術作品の中から、モノと話す、モノが感情をもっているとする表現のあるものを探し、対象の部分抜き出して、その傾向を調べる。モノと言葉や感情のやり取りをすることをこの研究では「対無生物コミュニケーション」といい、対無生物コミュニケーションをする人を「対物対話者」という。対無生物コミュニケーションの対象は、山や木などの自然物とあらゆる人工物である。植物は生命であるが、「話す」「笑う」などの本来植物がしない感情表現のあるものを対象に含める。対無生物コミュニケーションと擬人法の判別は、職業などを持った具体的な人物像に擬人化されておらず、モノがモノとして感情表現をしていることを基準とした。ぬいぐるみや昆虫など顔のあるものは含まない。事例は1年あまりで18人を見つけた。

近代からは、詩人の立原道造、宮沢賢治、宮大工の西岡常一、L.カーン、アウトサイダー・アーティストのF.シュバルとH.ダーガー、絵本作家のV.L.バートン、アンネ・フランク、小説家のL.モンゴメリ、詩人のA.ランボーを参照する。現代人からは、先に紹介した手塚宗求とエリカ・エッフェル、片付けコンサルタントの近藤麻理恵、テレビタレントの石原良純、映画監督のW.カーウエイ、画家・詩人の星野富弘、写真家の三遊亭あほまろ、アンティーク評論家の岩崎紘昌を参照する。全部で6カ国から18名となった。事例のうち10人は、過去に読んだ本で心当たりのあったものを読み直して、対無生物コミュニケーションの表現を発見した。他は日常生活でたまたま出会う、知人に教わるなどして見つけた。

これらの人物の作品から対無生物コミュニケーションの表現がある箇所を抜き出し、コミュニケーションの個別の様態と全体の傾向を観察した。

〈対物対話の対象〉

通常対物対話者は、複数の対象とコミュニケーションをとる。対象の種類は個人によって異なり、家の中のモノに主に興味を向けている場合と、仕事の道具や材料に興味を向けている場合、そして、木や山や花などの自然物に興味を向ける場合などがある。また、風、夜、空など実体のないモノを実体として扱う場合もあった。

特定の対象に特に興味を注ぐ人物と、人工物、自然物両方に興味を注ぐ人物がいた。資料は限られており、自然物とは対話していないと言い切れないが、個人によって、関心の分野の違いがうかがわれた。それは

生活環境や普段どのようなものと触れることが多いかで決定されていた。

〈モノとの関係〉

対物対話者とモノとの関係で最も基本的なのは、人間とモノ自体という関係であった。モノは擬人化されず、建築家と材料、自分と花、という状態でコミュニケーションをとる。また、友人・連れという気軽に平等な関係で表現されるのもしばしば見られる。愛情が熱烈なものになると、彼らにとっては恋人や配偶者になる。また、忠実な連れ、子ども、という、自分がやや優位にあるような関係性もあった。

〈対無生物コミュニケーションの3つのあり方〉

対無生物コミュニケーションの実際のやり方としては、

1. 言語を使った交流
2. 身体を使った交流
3. 脳内の身体を使った交流

の3つがあった。1.の言語を使った交流は、多くは本人の頭の中で行われる対話や、対象への、あるいは対象からの声かけである。2.の身体的交流は、モノに触ること、家事をすること、キスすることなどであり、多くの場合言語の交流と同時に行われる。3.は、実際に身体で触れていないのに身体を使った交流の表現をすることである。

〈コミュニケーションの方向〉

モノが自分に話しかけてくるのか、自分がモノに話しかけるのかを見てみると、18人のうち12名はモノが自分に話しかけてくるという記述があった。また、モノが自

分に感情を表すということも含めれば、18人のうち16人にのぼり、対無生物コミュニケーションの根幹をなしていることが明らかになった。その他にも、モノが誰にともなく話す、第三者に話すといった表現も見られた。

自分からモノへ働きかけるのは、18人のうち11人であり、相互に感情や言葉を交わしあうのは10人であった。

<表現>

対無生物コミュニケーションの表現の語尾は、「花が笑う」「木が泣く」など、多くの場合、断定である。ただし、対物対話者らは幻聴を聞いているわけではなく、それがあくまで内的体験であることは自覚している。「～な様子」「～に見える」、「であるはずがない」という表現は、人物によるが全体として少数であった。

対無生物コミュニケーションへの態度としては、是非行ふべきだと考え他人にも推奨する人物もいれば、自分の内的な体験として、外に出す必要はないと考えている人物もいた。しかし、いずれも個人の中では重要な内的体験であり、ロマンチックな、あるいは対象を憐れむような文脈で感情を伴って表現され、執着の度合いは高かった。

<対象の行動と感情>

対物対話者が表現するモノの感情は、「笑う」「うれしい」というポジティブなものから「泣く」「悲しい」というネガティブなものもある。ネガティブな表現はモノが適切な状態に置かれていないときに表される。近藤とカーンは人物はモノを悲しませない

よう、敬意を表して取り扱うことが重要であると力説する。モノの感情はその他にも多様な表現で表される。立原は「笑おうにも笑えない」「身悶えする」「殆ど切ない情欲」など繊細な表現をしており、これは対物対話者の感性が投影されているためである。

<コミュニケーションが起きる状況>

コミュニケーションが起きる状況は、多くの場合1人でいるときである。具体的には、窓を開ける、突っ立っている、片づけをしている、火を見ているなどというときで、日常生活の中で発現する。また、それらの訪れは不意にやってくるものである。

<対物対話者の行動の特徴>

対物対話者の行動や関心の傾向としては、まず第一に空への関心の高さが上げられる。18人のうち7人は偏執狂とも言えるほどの強い関心を空に向けている。偏執狂的な関心の対象がモノにも向けられるときは、対象のモノの細かい描写をする、同じ場面やモチーフを作品の中で繰り返し用いるなどする。事例の中の有名でない人物はこの傾向は強く、不可解とも思えるような長く執拗な描写があった。

その他には、ほかの人間になりかわって台詞を話す「なりかわり」が6人の人物に見られた。これは頭の中で行われることもあり、実際に口に出して行われることもある。また、他人の極端な理想化や妄想的傾向が一部の人物に強く現れていた。また、これらの一部の人物には愛情の発作とも呼ばれるべきものがあり、そのロマンチックな表現は実際の人間にもモノにも注がれる。

また、自然の美しさに心を打たれるなどして恍惚感を得る表現が9人で見られた。

<脳科学的なひとつの仮説>

下の図は、対物対話者の脳の情報処理の経過を、通常の情報処理の経過の違いの仮説を表したものである。

対物対話者らにおいては、視覚情報が優先し、相手の言葉からの情報の読み取りの割合が小さい可能性がある。つまり、対物対話者らにおいては対話ということは視覚で対象を読むものと認識されている可能性がある。よって、相手の声が聞こえても聞こえなくても、対話自体はほとんど成立するのである。対物対話者は特定の対象に対して、偏執狂とも呼ぶべき観察眼を発揮することがあり、それが人間から得られる情報量と同程度となったときに、「モノが～と言っている」と断言するのである。

<環境に結びついた身体イメージ>

対物対話者は、対象のモノの身体や心の痛みを敏感に感じ取る。また、対象のモノも人間側の気持ちを敏感に感じとり、共鳴

するように表現される。対物性愛者らによると、彼らはモノの知識を集めて対象を内在化することでモノと愛し合うのだという。対物対話者は、対象の深い観察によって対象を内在化することによって、自分とモノの間に目に見えない神経系を構築しているようだ。これは研究の中で紹介した対物対話者だけの体験ではない。だれしもモノへの愛着をもっており、それらの状態の変化が人間の感情に影響を及ぼすという意味では、だれでもがモノと対話している。

人間が生きてゆくことは自ずと、自己の周辺環境にあるモノの絶えず内在化であり、人間と周辺環境の神経は分ちがたく癒着している。見えない神経によって結合した状態こそ人体のより完全に近い姿である。よって、建築や土地は単に資源であるだけでなく、まさに我々の身体の一部である。であるから、モノを建造したり、壊したりすることは、単に実用性や効率を向上させるためだけの行為でなく、私たちの身体を形成し、解体し、変形させ、どのような存在かを決定する行為なのである。

